

一流の技を真剣に学ぶ一年間。  
熱意が美しい作品となる。



講師／武蔵川 義則



講師／木津 繁治



講師の手の動きを真剣に見つめる受講生の皆さん

養成スクールには、1年間の専門コースがある。平成20年度の漆工の専門コースでは、青貝塗を実施。塗り工程の指導を木津繁治さんが、青貝工程を武蔵川義則さんが担当した。

青貝塗は、高岡漆器の代表的な技法のひとつで、鮑貝や夜光貝などを使って、図案を表現していく。まずは、木地固めから始まり、下地塗り、研ぎ、中塗り、研ぎと工程を重ね、ようやく貝を切り、張る工程となる。

その絵柄は受講生が自分で考えたものの。講師の指導を受けながら、細かな作業を続ける。講師が次の工程を始めると、一斉に集まり、手元を見つめる。作業しながらも質問が飛び交い、講師が技を語る。月2回の短い時間に、少しでも学ぼうとする気持ちが伝わって

くる。この後、上塗り、研ぎを重ね、完成となる。

受講生の一人は、「青貝の放つ色彩にひかれて受講しました。思った以上に好きになった」と話す。武蔵川さんは、「皆さん、センスがいい。技術は難しいが、続けられれば進歩していく」と語る。

木津さんも、「修了後も作り続けて、展示会などで作品を発表してほしい」と語る。美しく光る作品は、1年間の熱意の輝き。修了生たちはそれぞれに次の一歩を歩き出す。

### 受講内容

金工	年限	日時	年間回数
基礎コース〔彫金〕	2年	毎週木曜午後6時～9時	約30回
研究コース〔彫金〕	2年	毎週木曜午後6時～9時	約30回
専門コース〔鑄造〕	1年	第2、4土曜日午後1～5時	約20回

漆工	年限	日時	年間回数
基礎コース〔塗り〕	2年	毎週木曜午後6時～9時	約30回
研究コース〔螺鈿・蒔絵〕	2年	毎週木曜午後6時～9時	約30回
専門コース〔青貝塗〕	1年	第2、4土曜日午後1～5時	約20回



受講生の作品  
(貝を貼り終えた段階)

## 技 伝 承

W A Z A  
D E N S H O

伝統的工芸品技術・技法継承者育成事業



広瀬さんの作品を見る高瀬さん(上)。広瀬さんの作品「テントウ虫の小箱」。雨は青貝塗、葉とテントウ虫は蒔絵で表現(左)。

漆黒の表面に、緑の葉と橙のテントウ虫の趣のある図柄が彫刻のように立体的に浮かび上がる小箱。高岡漆器で「蒔絵」という伝統技法を唯一守り伝える高瀬竜一さんの指導を受け、広瀬麻起子さんが制作中の作品だ。

蒔絵とは、漆と砥の粉、少量の水で練り合わせた錆漆(色漆)を重ね塗りするもので、立体的な描写表現が特徴。塗っては乾燥漆風呂に入れて錆漆を乾かす作業を繰り返して、肉を盛り上げていく。天然の塗料である漆は、湿気がないと乾かないといった特性がある。蒔絵は肉厚なだけに、湿気の調節が一層難しくな

● 漆器・蒔絵  
高瀬竜一(育成者)

広瀬麻起子(継承者)



る。逆に湿気がありすぎると、錆漆の表面に縮み皺ができて作品が台なしになってしまう。指導は、錆漆の調合法や塗り方から乾燥の仕方まで及ぶ。「その日の気温と湿度で錆漆の扱いがまるで異なり苦労しているが、深い色合いが魅力」と広瀬さんはいう。

繊細で緻密、そして生命感溢れる表現を持ち味とする高瀬さんが、広瀬さんら若手の職人になによりも磨いてほしいのが、感性とデザイン力。「自然の風景や動植物などを写生すること、先人の技法や現代の優れた作品を鑑賞することが大切。そして、漆の特性や乾燥の仕方を把握し、いかに美しく仕上げられるか。そのためにもどのような仕事や段取りがあるかを学んで、次代を見据えた作品づくりに取り組んでほしい」とエールを送る。

### 高瀬 竜一

- 昭和21年 父直に師事
- 昭和62年 高岡市伝統工芸産業技術者養成スクール講師(～現在)
- 平成 5年 高岡市教育功労者表彰
- 平成 6年 富山県中小企業団体中央会表彰(卓越技術者)
- 高岡市伝統工芸産業技術保持者に指定
- 平成 7年 伝統的工芸品産業功労者表彰(中部通産局長表彰)
- 平成10年 高岡市市民功労者表彰
- 平成14年 富山県民功労者表彰(技能)
- 平成18年 現代の名工表彰